病棟看護師向け口腔ケア教室を看護部からの依頼により実施

口腔治療室以外で口腔ケアを行う場合は器具・材料一式をセットしたワゴンを持参

検査を行うVE回診、がん化学療法口腔回診などチーム医療にも積極的に参加。患者さんが退院するときには、適切な医療機関や訪問診療を行っている歯科医師を紹介したりもしている。

「各診療科の主治医や病棟看護師はもとより、NSTやRSTは多職種、ミールラウンドは摂食嚥下障害看護認定看護師と、VE回診はリハ専門医やSTと、がん化学療法口腔回診はがん化学療法看護認定看護師と、退院支援は地元歯科医師会と、というように、院内外でさまざまな組織、人と協力し合って、“つながる歯科医療”を展開しています」と寺中先生が言う。中には必ずしも診療報酬の対象とならない活動もあるが、歯科医療の質向上を目指し、時間をつくって行っている。

足利赤十字病院では病院をあげて口腔ケアを推進しており、基本的に65歳以上の高齢者、40歳以上の特定疾病の入院患者さんにはリハ科歯科部門が介入する。また、がんや心臓病の手術を控えた患者さんには入院時に精査を行い、クリーニングを施し、必要に応じて処置もし、術後のフォローアップも行う。

例えばICUでは定期的に、歯科衛生士と看護師が協力して患者の口腔ケアを実施。こうした中で日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士の資格を持つ歯科衛生士の堀越悦代さんが看護師への指導も行うので、日ごろの口腔ケアは看護師主体で行ってもらうことができる。歯科医師は定期的にICUを訪れ、患者さんたちの口腔の状態の評価や処置を行っている。

「全身麻酔を伴う手術では、呼吸管理のために口の中に管を入れます。そのため口腔が汚染されていると、敗血症や肺炎など重大な合併症につながるおそれがあります。そういった合併症の予防に、主治医や麻酔科医と協力して取り組んでいるのです」と寺中先生が歯科部門の役割の一端を語る。

ベッドのまま入室できる口腔治療室にST5とスマイリーGMを配備

手術前後の処置や口腔ケアは、病室で行う場合もあるが、入院前、あるいは入院後に病棟からリハ科口腔治療室に来てもらって行うことも多い。

リハ科口腔治療室は、リハビリテーションセンターと同じフロアである中央診療棟4階にある。院内の一部を改装したシンプルな長方形の部屋で、生体情報モニター、酸素吸入設備など口腔外科とほぼ同様の設備を有する。ほかに舌圧計や嚥下内視鏡などはリハ科と共有している。

ユニットは壁に向かって2台、入口に近いほうにST5、奥にスマイリーGMが並ぶ。ベッドのままでも入れるように入口と診察室の段差がなく、ユニット間が広いのが大きな特徴だ。レザーカラーは明るく上品な色調のライラックで統一。2014年の開設時のスタッフ全員でオサダのショールームに出向いて選んだ。

「私の所属医局である東京医科歯科大学でも、そのあと勤務したいくつかの歯科医院でも、圧倒的にオサダ製ユニットが多く使いやすい印象がありましたし、当院の口腔外科もオサダ製なので、迷わずオサダを選択しました。そのうえで、有病者や高齢者の診療を想定したST5をまず選び、患者さんの診療室での動線、点滴や酸素ボンベなどを置けるように、ST5と同様にワークテーブルがカートタイプでチェアの前方に空間をつくりやすいスマイリーGMを並べました」と話してくださった。

病院歯科の新しいあり方を提示。情報発信と人材育成が課題

寺中先生は、「リハ科歯科部門の活動において、歯科衛生士の役割は非常に大きい」と指摘。「VE回診ではチームのほかのメンバーより一足先に患者さんのもとへ行って口腔ケアを行い、口腔の清掃と機能運動をしておいてくれるので、患者さんにとっても医療スタッフにとっても検査がしやすい。看護師を対象に口腔ケアの教室も継続して行ってくれているので、院内全体の口腔ケアのレベルがアップしています。ほかにもあらゆる場面で歯科衛生士に助けられています」とその活躍ぶりを讃え、「できれば歯科衛生士の数を現在の倍以上に増員したい」と語る。

今後は、歯科部門開設時から勤務している尾﨑研一郎先生によるデータの蓄積や学会発表をはじめ、岡田猛司先生による嚥下機能検査の最先端である「320列マルチスライスCT」の研究など、同部門の活動内容をより広く紹介することを考えている。また、歯科口腔外科とは別に、リハ科歯科部門での歯科医師の育成も課題の一つだが、現在までに豊富な経験と実績が蓄積され、すでに日本老年歯科医学会の研修施設の認定も受けており準備は万端だ。

リハ科内の歯科という、歯科医療の新しいモデルを示した足利赤十字病院リハ科歯科部門。その組織のあり方、活動に、ますます注目が集まりそうだ。

320列マルチスライスCT

ICUでは看護師（青いウエア）との協働で人工呼吸器を装着した患者さんなどの口腔ケアを行う

病室に嚥下内視鏡を持ち込み、言語聴覚士（ST）と共にVE回診

多彩な活動で、病棟での歯科存在感を示す歯科医師と歯科衛生士。向かって左端から堀越悦代歯科衛生士、岡田猛司先生、尾﨑研一郎先生、寺中 智先生、天海優希歯科衛生士

ICUでの多職種カンファレンスの様子

- 開業年月　2010年10月
- 主な機器や設備　オサダST5システム1台　オサダスマイリーGM P2-MS 1台
- スタッフ構成　歯科医師3名、歯科衛生士2名

足利赤十字病院 リハビリテーション科 歯科部門

栃木県足利市五十部町 284-1

全国的にも稀なリハ科内の歯科
多職種連携で高品質の歯科医療を提供

「当院のような歯科医療を行う病院が増えることを願っています」
足利赤十字病院 リハビリテーション科 歯科部門
歯科医師　寺中 智 先生

2010年10月に歯科医師1名でスタート

足利赤十字病院は1969年に開設された、急性期医療を主体とした地域の中核病院だ。現在の場所に新築移転したのは2011年。新病院の病床数は555床で、うち50床が回復期リハビリテーション病床である。

分棟型の建築、全室個室の一般病床、充実した災害対策などで多方面から注目を集め、医療分野で優れた建築プロジェクトを決める「IFHE国際医療福祉建築賞2016」で最優秀賞を受賞（2016年4月）、医療建築物では世界一となった。昨年も「平成26年度省エネ大賞」（主催：一般財団法人省エネルギーセンター）の最高賞である「経済産業大臣賞」受賞（2015年1月）、医療施設の国際的な認証機関であるJCI（Joint Commission International）の認証取得（同2月）など国内外で高い評価を受けている。

このような同院の画期的な取り組みの一つに、リハビリテーション科（以下、リハ科）に歯科部門を設けたことがある。摂食嚥下リハビリテーションの発展に伴い一般病院における歯科の重要性が再認識されている昨今だが、同院ではすでに移転前の2010年10月にリハ科歯科部門を開設。また、部門としての活動が定着し充実してきた2014年には、リハ科口腔治療室が設置された。同じ歯科でも歯科口腔外科とは全く別の組織で、双方は役割分担をしながら協力し合っている。

先駆的取り組みで知られる足利赤十字病院

リハビリテーションセンターと同フロアに開設されたリハ科口腔治療室。入室時には手指衛生を徹底している

ST5とスマイリーGMが並ぶ。ユニット間にはベッドが入れるように広い空間がある

歯科衛生士による回復期リハビリテーション病棟デイルームでの口腔ケア、摂食機能療法の様子

「2010年4月にリハ科専従医師として赴任した馬場 尊（みこと）医師が摂食嚥下リハに造詣が深く、リハビリテーションにおいては歯科医療スタッフによる摂食嚥下リハが不可欠との考えをお持ちでした。そこでまずは歯科医師1名で歯科部門をスタートさせました。その後、実績が認められるとともに歯科衛生士が配置され、医師が増員され、という流れを経て、現在は歯科医師3名、歯科衛生士2名が在籍しています。歯科医師は3名とも、歯科衛生士は1名が日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士です」と、歯科部門開設の経緯や態勢を説明するのは、2013年12月から同部門に勤務する歯科医師、寺中 智（さとし）先生だ。

リハ科には現在、リハ専門医2名のほか理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）など計60名のセラピストが勤務している。急性期病院にこれだけのリハスタッフが勤務している例は珍しく、とりわけ歯科部門があるのは極めて稀だが、誤嚥性肺炎の有意な減少など、確実に成果を上げている。

摂食嚥下リハ、ICUでの口腔ケア、各種チーム医療など多彩に活動

同院の歯科口腔外科では、難抜歯や口腔がん手術など地域の歯科医院では対応が難しい症例の診療を主に行っている。

これに対しリハ科歯科部門は入院患者さんに特化し、う蝕治療、歯周病治療、根管治療、義歯作成など一般的な診療全般、口腔ケア、義歯不適合などによる咀嚼障害に対する治療、摂食嚥下リハ、特殊な装具を利用した摂食機能療法などを、嚥下内視鏡検査、嚥下造影を駆使して行っている。舌を切除した患者さんが使う舌接触補助床（Palatal Augmentation Prosthesis：PAP）などは口腔外科との協働で作成する。

また、病棟カンファレンスへの参加、栄養サポートチーム（NST）、昼食時に患者さんの食事の様子を観察するミールラウンド、呼吸サポートチーム（RST）、嚥下機能に問題のある患者さんのベッドサイドで嚥下内視鏡（VE）